

南米大陸における「日本語新聞」の将来

澁澤 重和・成瀬 靖子

I はじめに

「日本語新聞」の将来を考える調査旅行は2004年、2005年に続いて3回目である。ここでいう「日本語新聞」とは、日本語で表記されている新聞のことを指す。当然のことながら日本国内で発行されている大多数の新聞も「日本語新聞」であるが、今回の調査は日本以外の国で発行されている日本語で表記された新聞に着目した。調査の主たる狙いは「日本語新聞」であるが、日本語を使用して発行されているメディアという意味では、必然的に「日本語雑誌」の調査も行うこととなり、調査は「日本語活字文化」の状況を対象とするかたちとなっている。

2004年、つまり1回目の調査では、米国カリフォルニア州のロサンゼルスとサンフランシスコ2都市の周辺で行い、その調査結果は「米国西海岸における日本語新聞の将来」として学苑773号(1)に報告した。この調査旅行では、世界に数ある日系人(元々は日本国籍を有していた、あるいは現在もなお日本国籍を有している人間を含む。日本国外に居住、あるいは滞在する人々には、すでに滞在先の国籍を取得して日本国籍を喪失している者から短期の滞在者までさまざまなレベルがあるが、本稿ではそういったあらゆる人々を「日系人」という言葉で表現する)コミュニティの中でも、もっとも大きなものの一つである米国西海岸のカリフォルニア州で発行されている「日本語新聞」の状況を現地調査することによって、その現状と問題点を明らかにしようとした。その結果、米国西海岸の日系人コミュニティにおける活字文化は、私たちが当初、予想していたように衰退への一途をたどっているのではなく、日系人の関心の対象がむしろスポーツや芸能のような柔らかい記事の方向へ向かっていることが判明した。それは日本国内の活字文化に対する人々の関心の方向とも一致するものであった。

ロサンゼルスでは「羅府新報」、サンフランシスコでは「北米毎日」新聞、「北米タイムズ」(旧「日米時事」)が発行されており、「羅府新報」はすでに2003年に創刊100年を祝っている、海外での「日本語新聞」の中ではもっとも長い歴史を誇る新聞の一つである。発行部数という点からみても、米国西海岸というより、米国内で、いや世界でも有数の大「日本語新聞」である。しかし、これら有料の「日本語新聞」とは異なり、本当に勢いのあるのは、ロサンゼルの「日刊サン」とサンフランシスコの「週刊ベイスポ」という無料の「日本語新聞」であった。いずれも日系人が発行している日本語のフリーペーパーである。米国西海岸では、購読料をとらずにもっぱら広告料で経営を維持するフリーペーパーの方が有料の「日本語新聞」よりむしろ活気があるという事態を迎えていたのである。これはわれわれが想定していなかったことであった。

2005年、つまり2回目の調査は、米大陸北西部のシアトルとバンクーバーで行い、同様に「米大陸北西部における『日本語新聞』の将来」として学苑785号(2)に掲載した。米大陸北西部にある米

国ワシントン州のシアトルとカナダのバンクーバーは所属する国こそ異なるが、直線距離にすると200キロを切る近さである。しかし、やはりというべきかシアトルの「日本語新聞」は、2005年1月から無料紙に転換し、その一方でバンクーバーの「日本語新聞」は有料のまま発行を続け、発行部数に低減傾向はみられなかった。有料の「日本語新聞」がシアトルでは継続不可能の状況となり、バンクーバーでは健在だということは、シアトルへの日本からの移民の歴史は古く、すでに三世、四世の時代になっていて日本語の読み書き能力を欠く人が多数派になっている一方で、バンクーバーでは戦後移民の一世が依然として主力で、「日本語新聞」への郷愁、欲求が強いためであると考えられた。

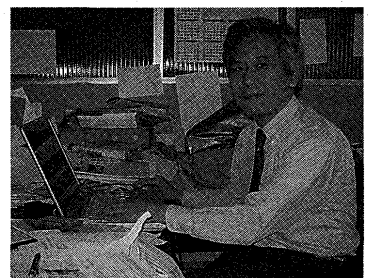
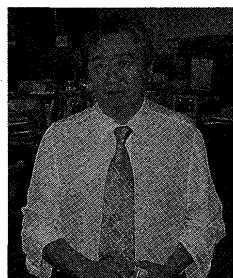
今回の3回目の「日本語新聞」調査は、同じ米大陸ではあるが、一路南へ飛んで南米大陸で行った。南米大陸で「日本語新聞」あるいは「日本語雑誌」が発行されている国は、ペルー、パラグアイ、チリなどがあるが、今回は海外でもっとも日本人の移民数が多く、大きな日系コミュニティー（コロニア）を形成しているブラジルとアルゼンチン両国に絞り、ほかの国については次回以降の調査対象とさせていただきたい。

II 現地調査の内容と方法

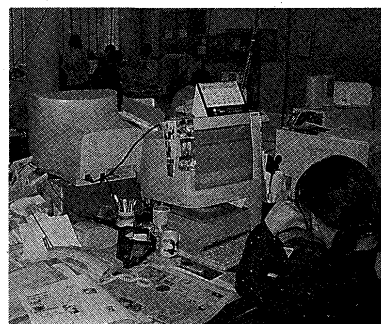
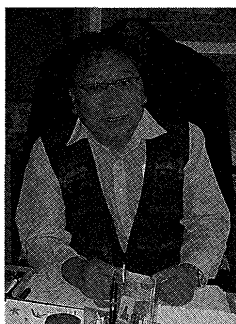
現地調査は2006年9月5日から14日の間に実施した。その間にヒアリングの対象としたのは以下の9名である（ヒアリング順）。アルゼンチンのブエノスアイレスでは「らぶらた報知」新聞社の日本語版編集長の高木一臣らに、また、ブラジルのサンパウロでは「サンパウロ新聞」社長のエドアルド・R・水本、編集局長の鈴木雅夫、編集局次長兼社会部長の田中敬吾、「ニッケイ新聞」社長のラウル・M・高木らに、そして日本語フリー雑誌の「月刊ピンドラマ」代表の高橋昭と編集長の布施直佐の2人にヒアリングをした（今回の調査には、本学人間社会学部現代教養学科の近藤友里も同行し、ヒアリングにあたった）。



「らぶらた報知」高木編集長（右）と筆者ら



「サンパウロ新聞」水本社長（左）と鈴木編集局長（右）



「ニッケイ新聞」高木社長（左）と社内風景



「日本語新聞」各紙

なお、「らぶらた報知」は日本語の題字をそのまま使っていて、スペイン語版では「LA PLATA HOCHI」を、サブタイトルに「NOTICIERO DEL PLATA」を使っている。「サンパウロ新聞」も同様に日本語の題字である。ポルトガル語版では「São Paulo Shimbun」を使っている。欄外では「サンパウロ新聞 São Paulo Shimbun」と双方を併記した用法である。「ニッケイ新聞」は日本語の表記とともに「Nikkei Shimbun」も使っている。さらに「月刊ピンドラーマ」は「Pindorama」を使用している。ただ、表紙の上部に日本語で「月刊ピンドラーマ」とある。本稿ではこれらを参考にして、それぞれ「らぶらた報知」「サンパウロ新聞」「ニッケイ新聞」「月刊ピンドラーマ」で表記を統一した。

本文中の肩書や数字はとくに注記がない限り、調査期間（2006年8月～9月）でのものである。併せて、敬称は略させていただいたことをお断りする。

高木 一臣 「らぶらた報知」日本語版編集長
崎原 朝一 「らぶらた報知」日本語版記者
エドアルド・R・水本 「サンパウロ新聞」社長
鈴木 雅夫 「サンパウロ新聞」編集局長
田中 敬吾 「サンパウロ新聞」編集局次長兼社会部長
ラウル・M・高木 「ニッケイ新聞」社主
神田 大民 「ニッケイ新聞」編集局報道部部长
高橋 昭 「月刊ピンドラーマ」代表
布施 直佐 「月刊ピンドラーマ」編集長

III 菊池寛賞に輝いたブラジルの邦字紙

「実際、サンパウロ市に住んでいると、あまり外国にいる感じがしないが、これは、同市には海外最大といわれる日系社会が存在するからである。東洋人街に行けば、日本語が通じ、日本のものが何でも手に入る……」と1970年代後半にブラジルの経済研究のため、同地に滞在した上智大学教授（当時）の水野一は書いている(3)。外務省のホームページによると、2005年10月現在におけるブラジルの在留邦人は、長期滞在者2,217人、永住者63,725人の計65,942人である。しかし、日系人総数となると約140万人となっており、海外で最大の日系コミュニティの一つがブラジルに存在することは明らかである。さらに水野は「こうした日系社会（ないしは日系コロニア）のメンバー相互間のコミュニケーションと、日本からの情報の伝達という二つの役割を果たしてきたのが邦字紙であるといえよう。」と日本語紙の役割を評価している。

ブラジルへの第1回移民が上陸したのは1908年だが、その8年後には早くも日本語新聞第1号が、週刊で発刊されている。その後もさまざまな邦字紙が発行されたが、戦中の1941年夏には、日本語による新聞の発行はドイツ語やイタリア語による新聞と同様に政府によって禁止されてしまった。

戦後第1号の日本語新聞社である「サンパウロ新聞」社が創設されたのは1946年10月であった。山田智彦はその著『遠い架橋——小説水本光任伝——』の中でこのように記している。戦後のブラジルの日系社会は、「勝ち組」と「負け組」とに分かれて争っていた。つまり、第二次世界大戦で日本

は負けたのではなく実は勝利を収めているのだと信じていたのが「勝ち組」で、日本は戦争に負けて連合軍に占領されていると主張したのが「負け組」だった。インテリでポルトガル語の新聞を読める人は「負け組」に属することが多かったが、この抗争は単なる争いにとどまらず死傷事件まで起こすという深刻な対立だった。現に、この年の3月にはバストス産業組合専務理事が「勝ち組」によって射殺された。さらに、4月には文教普及会事務長が、6月には産業組合中央会理事長が、というように「負け組」の論客が次々に殺害される事態となった(4)。こうした状態を何とかしなければならない、そのためには日本語の新聞を発行して世界のニュースを早く正確に知らせるしかない、それができれば誤解は生じない、と立ち上がった人物がいた。それが水本光任 32 歳、藤井卓治 35 歳、内山勝男 36 歳の 3 人(5)であった。初期の苦労は並大抵のものではなかった。この本は「小説」と銘打っているが、ブラジルへ出かけること合計 7 回、総滞在日数は約 7 カ月になるという徹底した取材に基づく山田の筆になるものだけに大半は事実に即したものと考えられる。

「活字も機械類も印刷工場もない。しばらく、リオに本社のあるブラジルの新聞の附録というかたちで発行することにし、発行所もその新聞社内に置いた。とにかくスタートしてしまおう、というのが仲間たちの合言葉となった。最初はクリシェ版といって、肉筆手書きの凸版を作った。記事を書いたのは内山勝男と小林清松で、整理編集には内山が当たった。さすが元新聞記者だけあって、内山は創刊号にふさわしい体裁を整えた。この原版を水本がかついで汽車に乗り四百キロも離れたリオデジャネイロまで行く。一日がかりで運び、印刷に半日をかけて、また一日がかりで汽車で持ち帰る。発行部数二千部であるからそれが出来た。駅へは内山をはじめ、小林に水本の兄の光秋、六男の浩九郎、それに妻の弟坂上一郎、沖田道春、伊丹金作などが交代で駆けつける。藤井卓治も商会勤めの時間を盗んではやってきた。彼等はこの刷り上ったばかりの新聞を、セエ広場を中心とした日系人のよく集まる場所で立売りをした。一カ所で二時間程売って、売れ足が遠のくと、別の場所に移るというやり方で、販売する場所が決まっているわけではなかった。」(6)

「クリシェ版」を創業者の水本光任は「クリッセ版」といった。水本自身がこう語っている。

「クリッセというのは、紙に字を書いて、それを写真にとって銅版を作るのです。それを紙型にとって、輪転機にかけ印刷する。印刷も、はじめは印刷機がないものですから、ブラジルの労働党、テラバリスト、そこの印刷機を借りて、印刷しておった。」(7)

水本光任は、山田智彦によると、「かつて熊本県下の下益城郡小川町海東(8)で、かなり規模の大きい精米所と製材所をやっていた」(9) 水本順太の三男だった。順太は、すでに地元に嫁いでいた長女を除く一家 11 人で 1929 年にブラジルのサントス港に着いた。一家はリベロン・プレート市郊外の耕地で 1 年の義務農年を終えると、ジャングルを切り拓いてその木材で炭をつくり、サンパウロへ出荷して利益を上げた。そして、その資金でサンパウロの中心街に日本式の旅館を建てた。サントス到着から 5 年後のことだった。光任は一家よりは 1 年早くサンパウロに出てきて、法律事務所に勤め、法律の勉強を続けていた。光任について山田は「ある意味では父親の性格をもっともよく引継いでいた。気骨、義侠心、包容力、親切心等々何をとっても父に似ていた。」(10) と表現している。

こうして起こした新聞社が 1980 年、財団法人日本文学振興会による第 25 回菊池寛賞に輝いた。受賞理由は「ブラジル在住の日系人 75 万人に対する邦字新聞としての報道、啓蒙、親善に果たした役割」(11) となっている。

1946 年 10 月創刊の「サンパウロ新聞」に続いて翌年 1 月には「パウリスト新聞」が発行を開始し

た。1949 年になると、「パウリスタ新聞」から分かれた一派が「日伯毎日新聞」を興し、日刊邦字 3 紙体制となる(12)。それからほぼ半世紀を経た 1998 年には、この両紙が再び合併して「ニッケイ新聞」を旗揚げした。以来、日刊邦字 2 紙の体制ができあがった。

IV 日本語新聞の発行体制

「日刊」とはいえ邦字 2 紙ともに週 5 日の発行で、日曜日付と月曜日付は休刊する。紙面を制作して降版時間は夜の 6 時半から 7 時ごろにかけてである。印刷も配達も外注なので、締め切り時間は絶対だ。「サンパウロ新聞」編集局次長兼社会部長の田中敬吾はこういう(13)。

「印刷を頼んでいるフォーリャ・デ・サンパウロには午後 7 時までには PDF ファイルにして送らなくてはなりません。8 時ごろまでには印刷を終えて、午前零時すぎに印刷がはじまるフォーリャ・デ・サンパウロ紙とともに配送会社のトランス・フォーリャのトラックに積み込まれるのですね。新聞は陸路、空路でブラジル全土の 71 都市に運ばれ、配達されます。空路の場合は国内線のコンゴニアス空港と、一部は国際線のグァルルヨス空港へ運ばれます。ベレンなどへは深夜便がありますが、残りは早朝の便です。そのトラックに遅れると、1 日遅れになってしまうわけですね。」

PDF はコンピューターによって処理された画像なので、印刷工場の側に「サンパウロ新聞」社の社員がいなくてもよい。以前に自社の工場で印刷していたときは、日本語の読めない印刷担当の職員が見出しの凸版が縦横逆になっているのに気付かずにそのまま印刷してしまい、読者の手元に届いたことが何回もあった、と編集局長の鈴木雅夫は笑った(14)。

このように印刷を外注したのは 2002 年のことだ。外注先のフォーリャ・デ・サンパウロは、発行部数が 40 万部から 50 万部ほどの、エスタード・デ・サンパウロに次ぐブラジル第 2 の新聞社だ。印刷された「サンパウロ新聞」は、それまでは郵送したり、サンパウロ市内については同社の配達員が配達していた。その配達もフォーリャ・デ・サンパウロの子会社であるトランス・フォーリャに委託した。鈴木はいう(15)。

「明日の朝に私たちが読む新聞を、ここサンパウロから 3 千数百キロ離れたアマゾンのベレンでも昼ごろには読める。ジェット機で 4 時間半ですから。主要都市、つまり州都の 20 都市ではすべてその日のうちに読めますね。民間航空のジェット機で運ぶのです。地方の読者は、この間まで新聞が 1 週間遅れるのは当たり前だったのが、ある日突然、その日のうちに読めるようになった。最近は半日とか 1 日遅れただけで電話がかかってくるからね。これまで 1 週間も 2 週間も遅れていたんだから 1 日ぐらい遅れたってどうってことないじゃないか、といたくりますが、そうじゃないんですね。

遠い土地には早く送れるようになりましたが、サンパウロ市内から 50 キロから 100 キロの地域は郵便で送らざるをえないので、そうすると到着がどうしても翌日だったり、翌々日になる。以前はどうしていたかというと、深夜便のバスに乗せて翌日の朝早くに地方都市のバスターミナルに着く。私たちは購読者が多い地域には代理人を置いていた。バスが着くと代理人が新聞を受け取って、例えば私書箱のようなものに入れておく。そうすると読者が取り出しに来るという仕組みだったのです。代理人というのはその地方で商店をやっていたりする人が多かったのですが、手数料目当てとはいえ勧誘もしてくれるし、購読の更新の際には手続きをきちっとやってくれた。一生懸命やってくれていたのですね。その代理人制度を廃止したので、代理人たちが反発してお客が一時的に『ニッケイ新聞』

の方に流れたこともありましたね。ただ、『ニッケイ新聞』さんも3ヵ月ほど前から私たちと同じ会社配送を委ねるシステムにしたのですが、慣れない配達員が『ニッケイ新聞』さんの読者を飛ばすこともあるようです。」

「ニッケイ新聞」社は、自社の輪転機で刷って、刷り上った新聞をトランス・フォーリアに運ぶシステムなので、締め切り時間は「サンパウロ新聞」よりも早い。

「サンパウロ新聞」の定価は1部2リアル（約106円）、1ヵ月の購読料金は86リアル（約4,558円）、半年だと250リアル（1万3,250円）である⁽¹⁶⁾。購読料の収入と広告料の収入の比率は購読料の方が大きいようだ。「ようだ」というのは、新聞社の経理は、というよりブラジルでは一般的に企業の経理は二重、三重帳簿になっていて、一般の社員では分からないためらしい。企業の収益に課せられる税率が極めて高いことがこのような事態を生んでいる。この点について鈴木はこういった⁽¹⁷⁾。

「購読料金の収入と広告料収入との比率がどうかということは、分かりませんね。なぜ、分からないのかというと、帳簿が二重帳簿、三重帳簿になっているのです。企業にかかる税金がものすごく高いので、どこの企業も二つも三つもバランスシートを作るので、私たちが見ているバランスシートが本物のバランスシートなのか、税務署に出すものなのかは、よく分からないのです。本物のバランスシートの中身を知っているのは、社長と専務ぐらいですね。でも、感覚的にいうと購読料による収入が7で、広告収入が3でしょうか。これが5対5になると、利益が出てくると思います。」

「サンパウロ新聞」の紙面は10ページ建てである。ページ建ては日本の新聞とは逆になる。日本の新聞でいう1面、つまりフロントページは「サンパウロ新聞」では10面にあたる。「サンパウロ新聞」の1面は、日本の新聞では終面にあたる。折りたたむときにはこの日本の新聞の終面の左肩にあたる部分が目に付くようにたたまれる。折りたたんでバンカ⁽¹⁸⁾で販売するときには、日本の新聞でいえば終面が、「サンパウロ新聞」でいえば1面が目に付くようになっている。これは印刷を外注に切り替えた際、1面と終面をカラー面にすることができるようになったためだ。そこで、1面の左肩には動きのある写真をもってくるべきだということになり、1面がスポーツ面になった。それ以来、読者に人気のある相撲や野球の写真が1面左肩を飾るようになった。

1面はスポーツ、2面は社会、3面は第二社会、4面はその日によって異なるが、読者ルームになったり経済になったり文芸になる。5面と6面はポルトガル語版である。7面は解説、8面は第二国際、あるいは日によって健康、特集、9面は国内、そして10面が国際となっている。ただし、木曜日付は1面がNHK番組表になるので、その日は8面がスポーツとなる。NHK番組表を掲載する木曜日付の売れ行きは平常の15パーセント増だ。

一方、「ニッケイ新聞」の定価は、一部2リアルで「サンパウロ新聞」と同じ。紙面のページの数え方は、「サンパウロ新聞」と逆、ということは日本の新聞と同じである。1面が国際、2面は国内、3面は第二国際、4面は文芸、5面が解説とその日のNHKの番組表、6面が経済、7面は芸能、8面と9面が第二社会と社会、そして、やはり折りたたんでバンカで販売するために終面、つまり10面にスポーツがくる。カラーページとポルトガル語のページはない。

両紙ともに10ページだが、これは郵送料との関係だ。これ以上、ページ数が増えると、郵送料が格段に高くなるので10ページが限界だと鈴木はいう⁽¹⁹⁾。

ニュースの提携先は「サンパウロ新聞」が読売新聞と時事通信、「ニッケイ新聞」が共同通信だ。「サンパウロ新聞」の場合、読売新聞が日本国内のコミュニティー・ペーパーに流しているサイトと

契約していてニュースを引き出している。例えば、紙面をみると「東京＝読売」とか「モスクワ＝読売」「ソウル＝読売」あるいは「時事」といった記事が出ている。「ニッケイ新聞」の方は日本のニュースについては単に「共同」とし、日本でいう外電については、「ロンドン8日共同」とか「ベイルート8日共同」というようにきちんとクレジットを付している。

「サンパウロ新聞」には内山勝男という名物記者がいた。内山を名物記者たらしめたのは、編集局長を経て編集主幹となるなど単に長く編集幹部であり続けたことだけではなく、2004年に93歳で死ぬまで社説とコラムの「余白」を書き続けたことだ。現在の編集局長は鈴木だが、関西大学在学中の1973年4月から1年間、「サンパウロ新聞」へ下見移住した。その経験を生かして卒業後の75年4月に「サンパウロ新聞」東京支社に入った。その鈴木はこういう(20)。

「内山が亡くなった後、社説もコラムもなくしたんです。1年以上も。そうしたら、いろいろな人からこれでは新聞の顔が見えないということをいわれて、それではと2006年1月4日付から書くことにしました。とにかく2008年の移住100周年の関連行事を成功させるために自分たちの主張をいいたい、ということで書きはじめたのです。私たちの新聞が日本の新聞と違うのは、日本の新聞は中道だ、中道だというけれど、私たちの新聞は最初からオピニオンリーダーなんですね。そのようなオピニオンリーダーの役割を果たしてきたし、今後も果たしていかなければならないので、どうしてもこのような社説という欄が必要になりますね。」

従業員は「サンパウロ新聞」が約65名、「ニッケイ新聞」は約60名。このうち編集関係の人数については、両社とも20数人という。発行部数については「サンパウロ新聞」が「公表は1万部ちょっとですが、実数は1万を切っているのではないのでしょうか。多いときは3万2,000部もあったんですが……」と田中はいった(21)。多いときには3万部を超す発行部数が海外で最大の「日本語新聞」といわれるゆえんだ。その発行部数も一世の数が少なくなるにつれて減ってきた。新聞の実売部数は日本でもなかなか明確ではないのが通り相場だが、「ニッケイ新聞」については、5,000部から7,000部らしい。

V サンパウロでのフリーペーパーの可能性

ブラジルでは日本語のフリーペーパーは成立しにくい。それは読者が少ないからだ。ということは、それだけ広告を集めにくいということになる。読者というのは在留邦人、とりわけ観光客の数が重要だが、さすがに日本からみると地球の裏側にあたる土地だけにまだまだ日本から足を運ぶ観光客の数は少ない。

そうした環境に果敢に挑んでいるのが、「月刊ピンドラマ」だ。A5判とやや小さめで、表と裏の表紙まで数えて全48ページ、うち中面12ページと、表紙まで含めた外側8ページがカラー刷りだ。2006年6月5日にVol.0号(準備号)を、7月5日にVol.1号(創刊号)を発刊し、毎月5日に出版している。2006年9月5日にはVol.3号を出した。内容は政治、経済から音楽や料理まで多彩だ。執筆者には原稿料を支払っているというのだから、ペイしなくても無理はない。原稿依頼や送稿はすべてEメールを使い、編集長の布施直佐ともう一人で編集する。紙面が完成すると、CDに焼き付けて印刷所に運び、印刷、製本してもらう。刷り上った4,000部をスタッフが2、3日かけてレストランやホテル、広告主に配布する。

代表者の高橋昭はショーエイ出版社の社長。サンパウロの日系出版社として名が通っているが、この「月刊ピンドラーマ」には、名前を貸しているだけらしい。全責任は布施が負っている。

布施は東京で予備校の英語教師をしていたが、2004年に友人を頼ってブラジルに来て、その魅力の虜となった。近くブラジル人女性と結婚する予定で、結婚という事実によって正規の永住権ではないが、既成事実としての滞在権が発生するという。布施は「月刊ピンドラーマ」の将来について、こういった(22)。

「広告がもう少し欲しいですね。広告は号を重ねるたびに増えています。しかし、現段階ではペイできてはいません。だから、いまのところ代表と編集長の給料はありません。でも、半年間はもち出しで仕方ないと思っていますので。」

VI アルゼンチン唯一の「日本語新聞」

アルゼンチンで唯一の「日本語新聞」が「らぶらた新報」である。発行が認可されたのは『別冊新聞研究 No. 19』によると、1947年9月15日だったが、実際に第1号が出たのはそれよりも遅れて48年の1月17日だったという。戦後、アルゼンチンで最初に発行された「日本語新聞」は「新日亜」であり、次に「亜国日報」の順で、「新日亜」は創刊から半年後に「ばんあめりか」と改題する。その次に、つまり3番目の日本語新聞として発刊されたのが「らぶらた報知」だった(23)。

初代社長の平良賢夫に協力して発刊を手伝い、のちに専務取締役となった新垣喜盛によると「すでに二つの日本語新聞が存在している中に、われわれが発行するのですから、その点、十分注意を払い、われわれの新聞は、日本人会ならびに県人社会を強固にするための補助機関だということを理想にし、次のような綱領を掲げて発行の運びに至ったのです。」(24)として、以下の5項目の綱領を挙げている。ここで「県人社会」というのは、沖縄県人社会のことだ。というのは、当時のアルゼンチン在住日系人の70%から75%が沖縄県出身者だったからだ。

- 一、沖縄が不幸にして日本版図を離れる場合起こるであろう人心の動揺に対し、これを緩和善導する言論機関たらしめる。
- 一、我等同胞は敗戦国民たる不良条件のもと生活する以上、今よりもっと融和提携、共存共栄の途を講ずる。
- 一、従来の偏見狭量独善的思想を抛棄し、自他相愛、相啓する道德情操の涵養に努める。
- 一、日本本土と沖縄は同一民族で、言語、文化、地理、経済及び精神的血縁関係が絶えざる故、日本民族主義を一貫する。
- 一、在亜同胞のよき新聞たらしめる。

このような信条で新聞を編集発行していた。当然、3紙が並立して発行されているので、経営は苦しかった。しかし、綱領に盛った目標を達成していない以上、他紙との合同は考えられなかったと新垣はいつている(25)。

初代社長の平良賢夫は1970年にパンアメリカン航空の招待旅行ということで沖縄訪問の機会が与えられた。ところが、旅行先の沖縄で病没してしまった。そこで、娘婿の比嘉良秀が1971年の株主

総会で社長に推された。現在の社長のアントニオ比嘉は4代目である。日系人であること、沖縄県人会に所属していることから選ばれた。元々は「らぶらた報知」社の顧問弁護士であった。

日本語版編集長の高木一臣は1966年の入社である。高木の話によると(26)、「ぱんあめりか」は1960年代に廃刊し、「亜国日報」も1990年代に廃刊となった。「亜国日報」の廃刊には日本のバブル景気もからんでいた。当時アルゼンチンでは景気の良い日本への出稼ぎがブームとなり、植字工はもちろん記者や編集者までが日本へ出稼ぎに行くようになった。出稼ぎで稼げる収入を上回る人件費を「亜国日報」は支払うことができずに倒産した。「らぶらた報知」も社員の中に出稼ぎに日本まで行くという選択をする人が多かったという点では、同様の状況に陥った。しかし、「らぶらた報知」は女性を採用することによってこの危機を乗り切った。というのは「日系人の中にはクリーニング業を営んでいる人が多かったんです。夫が洗濯、アイロン掛けをして、妻が接客を担当するのが一般的でした。しかし、このクリーニング業にも機械化の波が押し寄せ、労働力が浮いていました。新聞社ではそのような女性に目をつけて労働力不足をしのいだのです。彼女たちは給料をさほど当てにしていなかったのではなく、自分たちの都合に合わせて働ける新聞社の仕事は、うってつけだったんです。その後、活字による印刷をパソコンで行うようにしたときにも、パソコンそのものはJICA（国際協力事業団、現：独立行政法人国際協力機構）を通して日本から寄付してもらいましたが、パソコン技能をもっている人を採用するとなると、それだけ高い賃金を支払わなければならないのですが、そこを1年から2年かけて彼女たちにパソコンを覚えてもらって、パソコンによる印刷に移行していきました。従来からの従業員であれば特別の賃金増は必要ありませんでしたからね。」と高木はいう(27)。

こうしてアルゼンチン国内で発行されている「日本語新聞」は「らぶらた報知」一紙となった。同紙は火、木、土の週3回発行する。火曜日発行ということは、実際の編集や印刷は前日の月曜日に行う。月曜日の午後2時に原稿を締め切り、版を作成し、4時から5時にかけて市内の印刷所で印刷をする。刷り上がった新聞は一部一部に宛名を記した帯封をしたうえで中央郵便局にもち込んで郵送する。日本の「第三種郵便」といった特別の割引制度はなく、1ヵ月の購読料は郵送代込で35ペソ（約1,365円）である(28)。こうして約3,000部がアルゼンチン全土の日系人家庭、あるいは日本まで送られる。全て郵送であり、1部売りはない。郵送なので配達員の勤勉さに頼ることになる。ときには1週間分とか1ヵ月分をまとめて配達されることがあり、読者から抗議の連絡が絶えない。郵便局に抗議すると、しばらくはきちんと配達されるが、やがてまた元のもくあみに戻ってしまう。「ラテン系国家機関の役人の常だ」と高木は笑った(29)。

紙面は1面が日本における政治・経済の記事、2面が日本の社会的な記事と社説「展望台」、3面が文芸、健康、そして4面が日系社会の出来事、それに国際問題となっている。これに、木曜日は4ページのスペイン語版が付く。つまり火曜日付と土曜日付は4ページだが、木曜日付の紙面は倍の8ページとなる。

VII まとめ——南米における日本語紙誌の将来

ブラジルやアルゼンチンへの移民は、現在はほとんどいない。移住者が来ないということは日本語新聞に先がないということ、と「サンパウロ新聞」の内山勝男が、もう20年以上も前に認めていた。内山はこう述べている(30)。

「移住者が来ないっていうことは、日本語新聞にそれだけ先がないっていうことです。二世で日本語新聞が読めるというのはほとんどいないですからね。日本語学校が、がたがた言っても、みんな日本語離れしちゃうんだ。結局、環境でしような、環境作りを忘れとったということですよ。日本語学校に通わせれば、それで大丈夫だというぐらいに思っていたんですね。僕らは口をすっぱくして言ったんです。とにかく話す環境を作らなくては物を忘れていっちゃう。言葉というものは、子供は早く覚えるかわりに早く忘れる。それに歯止めをしなきゃいかん。(中略)だから僕らも初めは、新聞にポルトガル語のページを作って、それを二ページぐらいにふやして、それで二世の読者を引っばろうと思ったんですが、結局だめです。このごろはもうあきらめましたよ。それで、場合によったらポルトガル語版などやめて、とにかくいま残っている読者を大事にして、日本語で全部埋めてゆこうかな、というぐらいに思っているんです。」

また、「らぶらた報知」新聞の二代目社長比嘉良秀も「移住者あつての報道であり、新聞である以上、現在のような後続移住者が少ないというよりか、ほとんど来ない現状においては、本当に将来これがどうなっていくか一まつの不安を覚えずにはおれません。切実な問題です。」と、いっている(31)。

高木一臣の話によると、アルゼンチンには日系人が4万人いる(在ブエノスアイレス領事館は3万5,000人と発表している)が、この日系人の数が増える見通しはない。日本語の読み書きができる日系人という意味でならむしろ減っていくと考えるのが当然だという。そのとき「日本語新聞」の将来はどうなるのか、という課題は「らぶらた報知」にとつてと同様に「サンパウロ新聞」にも重くのしかかっている。スペイン語版やポルトガル語版の新設はその一つの解決策と思われたのだが、果たしてそれで十分だったのだろうか。「日本語新聞がもっとも売れたのは、1950年代～1960年代にかけてでした。当時はアルゼンチンでは唯一の日本のニュース源でしたから。今では日本からの新聞が届くようになっていし、NHKの衛星放送によって日本で何が起きているかを知ることできます。ですから、一世が亡くなると購読を止めてしまうケースがほとんどです。10年後にはスペイン語版と日本語版の位置が入れ替わって週に1回日本語版が発行されているということにもなりかねません。」と高木はいった(32)。

二世、あるいは三世の邦字紙離れが急速に進んでいるという事実を背景に、サンパウロの「ニッケイ新聞」社はポルトガル語の新聞の発行をしはじめた。それが毎週土曜日に発行されている「JORNAL NIKKEI」である。筆者の手元にあるのは9月の9日～15日号だが、タブロイド判全14ページで、その内容はブラジルの日系社会の出来事である。「ニッケイ新聞」の付録ということで、週2回出しはじめたが、9月になって週1回となった。やはり、広告がとれないのである。もう一つ「JORNAL NIPPO BRAZIL」というポルトガル語の先達紙があったこともある。こちらは日本にある「インターナショナルプレス」という会社の経営である。いずれにしても新聞は購読料金だけではもたず、広告収入がないとやっていけない。

北米ではフリーの新聞や雑誌が多くなり、有料購読の新聞のうちのいくつかはフリーペーパーとなった。しかし、日本人観光客の少ない南米ではこれが難しい。「サンパウロ新聞」の鈴木は「北米の新聞はフリーペーパーに進出していたら儲けられたのにやらなかった。なぜやらなかったのか」といふと、既成の「日本語新聞」の読者は移民ですよね。移民を対象に新聞を作っている人たちが、移民ではなくて新しく入ってきた観光客たち向けに読まれるように紙面の内容を変えると、それまでの読者の移民たちから猛烈な反発を受ける。それが怖かったのです。ですから、元々あるものを大切にしてい

動かなかったのです。」という(33)。

ブラジルでもアルゼンチンでも有料邦字新聞の命脈が危ぶまれている。

注

- (1) 昭和女子大学, 平成 17 年 3 月
- (2) 昭和女子大学, 平成 18 年 3 月
- (3) 社団法人日本新聞協会『別冊新聞研究 No.19』所載「聴きとりでつづる新聞史」, 1985 年 4 月, p.4
- (4) 山田智彦著『遠い架橋—小説水本光任伝—』, 毎日新聞社, 1988 年, pp.138~139
- (5) 山田前掲書, p.142
- (6) 山田前掲書, pp.165~166
- (7) 「聴きとりでつづる新聞史」, p.26
- (8) 海東には, 東海東, 西海東, 北海東, 南海東の 4 つがあり, 平成 17 年 1 月 15 日に小川町から宇城市に併合された。
- (9) 山田前掲書, p.4
- (10) 山田前掲書, p.6
- (11) 文藝春秋『文藝春秋』, 1980 年 12 月号, p.408
- (12) 「聴きとりでつづる新聞史」, p.4
- (13) 2006 年 9 月 11 日, 「サンパウロ新聞」社でのヒアリング
- (14) 同上
- (15) 2006 年 9 月 11 日夜, ニッケイパレスでのヒアリング
- (16) 2006 年 8 月 4 日現在 1 レアルは 53 円 09 銭 (フリー百科辞典『ウィキペディア』による)
- (17) 2006 年 9 月 11 日夜, ニッケイパレスでのヒアリング
- (18) バスターミナルや街角 (歩道) にある。日本でいう「キヨスク」
- (19) 2006 年 9 月 11 日夜, ニッケイパレスでのヒアリング
- (20) 同上
- (21) 2006 年 9 月 11 日, 「サンパウロ新聞」社でのヒアリング
- (22) 2006 年 9 月 12 日, ショーエイ出版社でのヒアリング
- (23) 「聴きとりでつづる新聞史」, pp.76~77
- (24) 「聴きとりでつづる新聞史」, p.115
- (25) 「聴きとりでつづる新聞史」, p.115
- (26) 2006 年 9 月 6 日, 「らぶらた報知」新聞社でのヒアリング
- (27) 同上
- (28) 2005 年 7 月 12 日現在 1 ペソは 39.0 円 (『地球の歩き方 B 22 アルゼンチン／チリ 2005~2006 年版』ダイヤモンド社刊, 2005 年)
- (29) 2006 年 9 月 6 日, 「らぶらた報知」新聞社でのヒアリング
- (30) 「聴きとりでつづる新聞史」, p.43
- (31) 「聴きとりでつづる新聞史」, p.120
- (32) 2006 年 9 月 6 日, 「らぶらた報知」新聞社でのヒアリング
- (33) 2006 年 9 月 11 日, 「サンパウロ新聞」社でのヒアリング

(しぶさわ しげかず 現代教養学科)

(なりせ やすこ 日本語日本文学科)